今日のイラスト 524　「 イラストでたどる石州街道③ 山口大神宮遥拝所 」　古谷眞之助

イラストでたどる石州街道 03 山口大神宮遥拝所

我が国で初めて伊勢神宮から分霊を勧請することを許された山口大神宮は「西のお伊勢様」と呼ばれ、中国、九州地方の人々の信仰を集めていた。しかし、幕末長州藩が攘夷を実行して城を山口に移すと、山口に通ずる道には関門が設けられたため、信者たちは西のお伊勢様詣でが出来なくなってしまった。

そこで、まず古林新右衛門が雨乞山の麓の土地を寄進し、続いて小郡宰判の大庄屋や庄屋、そして村民までもが浄財を持ち寄って、藩の正式許可を得たのち、元治元年（1864）四月に建てられたのが小郡の山口大神宮遥拝所である。ここで拝めば山口大神宮に参拝するのと同等のご利益があるとされ、多くの人が喜んで参拝したと言う。

文・イラスト＝古谷眞之助

萩往還のガイドを長らくやってきたのに、実は幕末長州史と大いに関係のある、この遥拝所のことを知ったのはほんの数年前のことで、実際にここを訪れたのは１年前の石州街道第３次研修時のことだった。本文にも書いているように、江戸時代のお伊勢参りという社会現象は、よくよく読むと当時の厳しい身分制度や旅の制限があったにもかかわらず、「お伊勢参り」というその一言で全てが許されるという不思議な現象だったようだ。丁稚が主人に無断でお伊勢参りに出掛けても、それを主人が咎めれば、逆に主人が周囲から大いに非難されたという話とか、行きたくてもいけない人が犬を代わりに立てて伊勢参りをした「おかげ犬」の話など、本当かと疑いたくもなるが、実際にそうだったらしい。結局、このような動きを厳しく取り締れば、とんでもない反発を受けることは必定であり、為政者の側も敢えてそのような愚は避けたのではないか。つまりそれほどまでにお伊勢参りは人々の熱狂的な憧れでもあったわけである。

しかし、やはり中国九州地方の人々にとって伊勢神宮は遠い。そこで唯一分霊の勧進を許された山口大神宮詣でが盛んに行われたが、それが関門によって遮断されてしまう。藩としては致し方ない措置であったが、庶民は本当に困り果てたことだろう。関門のことなど知らずに、例えば九州の端から来てみれば、参拝が叶わないと知って途方に暮れた者もいたに違いない。それを哀れんだのが小郡宰判の大庄屋林勇蔵や庄屋たちだった。彼らは藩の正式許可を得たうえで、古林新右衛門が寄進した五反の敷地に村民の浄財も加えて元治元年（ 1864 ）4 月 12 日にこの遥拝所を建てたのである。その心意気や良しとすべきだろう。ここで参拝すれば、山口大神宮に参拝するのと同じご利益があるとされたのは、勿論のことである。（ 2022.7.9 記 ）